

総合教育センター

学生向け情報誌

クレードル

30号

CRADLE

Center for Research And Development of
Liberal arts Education
30th issue

全学教育推進機構 総合教育センターの仲間です

「はじめまして。ご縁に感謝して・・・。」

p.2 安川 幸子（総合教育センター）

探究と身体文化を通じた学びの場づくり

蒲生諒太です、よろしくお願いします

p.3 蒲生 諒太（総合教育センター）

今年も内容充実！

「森に生きる」

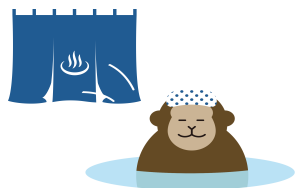
「ローカリーアクト天理 SDG s 森に生きる」報告

p.5 杉本 めぐみ（全学教育推進機構）

あの頃、中国に行く理由

p.10 山本 和行（中国語専攻）

たまにはご褒美を～



心の健康法 25

自分をいたわり、大切に取扱いましょう！！

p.12 仲 淳（総合教育センター）

「はじめまして。ご縁に感謝して…」

総合教育センター 安川 幸子

今年度より人文学部に着任いたしました、安川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私は、ホースセラピーに関する授業や、主に地域の小・中学校を対象とした馬のふれあい活動業務を担当させて頂いています。これまでは獣医師として動物病院で働いたり、県の畜産技術センターで牛の研究に携わったり…。他の多くの先生方と比べると異質な経歴を歩んできたかもしれません。どんな道を歩んで今にたどり着いたか、簡単に自己紹介させて頂きます。

子供のころから動物が好きだった私は、物心ついた時には「動物に関わる仕事がしたい」と考えていました。幼少期から人見知りで人とのコミュニケーションが苦手だった事もあって「動物なら大丈夫かも」と獣医学科に入り、そこで今の私の原点となる「馬」に出会い、馬術部に入りびたりの6年間を過ごすことになったのです。大学卒業後は仕事や家事・育児に追われ、なかなか馬とかかわる時間が持てない日々を送っていました。

さて、そんな私が今、なぜ天理大学でホースセラピー活動を担当しているかというと、人と馬のご縁のおかげだと思っています。天理大学馬術部の監督と前職で同期入社だったこと。鹿児島で私が乗っていた馬が、偶然にも天理大学馬術部に来ていた事。そして、その監督に「ホースセラピーに興味はないですか？」と声を掛けて頂いた事をきっかけに、天理大学の馬術部の活動に参加する事となったのです。

馬術部でのホースセラピー活動では、不登校や発達障害のお子さんと一緒に乗馬や馬との活動を行っています。初めのうちは「私のような人見知りが相手をして良いのか？」と、不安な気持ちで一杯でした。それでも、馬の話や飼っているペットの話、好きなゲームの話など少しずつ話せるようになり、今では自分から積極的に話してくれるまでになりました。かく言う私も、人付き合いが苦手で友達も少なく、なかなか自分の居場所が見つけれずにいた人間だったのですが、今はホースセラピーを行いながら私自身が逆に癒されているのかも

しれません。

現在、大学という新しい環境に身を置き、失敗や悩みは尽きないですが、支えて下さるスタッフや仲間感謝する毎日です。また、学生や社会人の受講生の方、ホースセラピーに参加してくれるお子さん達からも、沢山の笑顔とパワーを頂いています。大学の教員として、学術的な知識を伝えることや研究活動を行う事は大切な役割ですが、同時に地域の方々と繋がる活動を広げていく事の大切さも感じています。私の場合は馬好きだったこともあり、人と繋がるきっかけが「馬」だったのですが、きっかけは人それぞれ何でも良いと思います。何か得意なことや好きなことをきっかけに、人と人が繋がり、お互いに自分の居場所を見



馬術部セラピーホースの「てんてん」

つけていける社会になれば良いなあと願っています。

学生の皆さんの中には、何が得意なのか何をやりたいのか、まだ自分自身でもわからない方もいるかもしれません。でもまだまだ全く大丈夫です。好きなことや目指す方向が変わっても、前に進めずにその場で足踏みしたって良いと思います。私のように人生の半分を過ぎてから、数年前には想像もしなかったような環境に身を置くこともあるのですから！今は大学生生活のなかで様々な事に興味を持ち、毎日を大切に過ごしながら沢山の「好きなこと」を見つけて下さい。そしていつか自分の「好き」が人をつなぐ輪を広げるきっかけとなってくれば嬉しいです。

探究と身体文化を通じた学びの場づくり

蒲生 諒太です、よろしくお願いします

総合教育センター 蒲生 諒太

本年 4 月に天理大学人文学部に着任しました、蒲生 諒太と申します。教職課程の教育原理や学校教育社会学などを担当いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

私の専門は教育学です。これまで主に、探究学習や高大接続、大学教育に関する研究に取り組んできました。探究学習は端的に言えば、こどもたちの自由研究です。この学習方法の中心にあるのは、身近な疑問から問いを立て、資料を調べたり実験したりインタビューしたりしながら自分なりに考え他者に伝えるという営みです。近年は中学校・高等学校でも「総合的な学習の時間」や「総合的な探究の時間」が重視されるようになり、大学入試等でも評価されるようになり、高大接続の要になってきました。

私はそうした学びがどのように成立し、どのような支援によって深まるのかに関心を持ってきました。

この 10 年ほどは中学生・高校生が自分の研究や探究の成果を発表する場づくりにも関わってきました。IBL ユースカンファレンスという発表大会を主催し、すべての発表に評価フィードバックを行ってきました。その過程で発表や審査のデータを収集、分析したり発表後の口頭試問の方法を検討したりしてきました。発表大会を続けていると最初はうまく言葉にならなかった自分なりの考えが調査や発表、質疑応答を通じて少しずつ形を取り、本人にとって明確なものへと育っていく場面に出会います。教育とは知識を伝えるだけでなく、そうした洞察を促し、支え、他者と共有できるようにする営みでもあるのだと思います。こうした経験が探究学習や高大接続、大学教育への関心につながっています。

もう一つの関心は身体を通じた学びです。私は太極拳や気功の実践を 10 年以上続けており

茶道については20年以上稽古を続けてきました。太極拳や気功、茶道などの身体技法では言葉で説明を聞く、あるいは観念的に理解するだけでは十分ではありません。身体を動かし型を繰り返し自分の感覚を確かめながら、少しずつ理解を深めていきます。そこには教科書を読んだり講義を聞いたりする学びとは異なる、身体に根ざした知があります。教育学は学校や教室だけを対象にするものではなく、人がどのように経験を重ね、身体を通じて世界を理解し、他者との関係を築いていくのかを考える生活に根ざした学問でもあると考えています。

近年は、こうした身体文化を教育学や生涯学習の視点から考える研究や実践にも取り組んで



います。日本の太極拳普及史に関する研究を進めるとともに、気功や太極拳に関する公開イベントやセミナーの企画にも関わってきました。研究は論文を書くことだけで完結するものではなく、人が集まり、実際に体験し、対話する場をつくることによって深まる面があります。実践者、研究者、学生、地域の方々が同じ場に集まりそれぞれの経験を持ち寄ることで、教室内の授業とは違った学びが生まれます。天理の地でも学生の皆さんや地域の方々とともに、探究や身体文化をめぐる学びの場をつくっていければと考えています。

教職課程の授業では、教育の理念や制度を学ぶだけでなく、学生の皆さん自身が、これまで受けてきた教育を振り返り、これからの学校や教師のあり方について考える時間を作れたらと思っています。

教育原理では教育とは何か、学校は何のためにあるのかという根本的な問いを扱います。学校教育社会学では学校と社会の関係、教育機会、格差、多文化化する社会の中での学びなどを考えていきます。いずれも、最終的には自分の経験や社会の現実と照らし合わせながら考えることが重要な領域です。

問いを立て様々な方法でそれを深め自分の言葉にしていくこと、身体を通じて学ぶこと、他者とともに学びの場をつくること。これらを手がかりに、天理大学での教育と研究に取り組んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

「森に生きる」「ローカリーアクト天理 SDGs森に生きる」

全学教育推進機構 杉本 めぐみ

5月16日 午前・座学 午後・フィールドワークの報告



講師 佐竹 靖 氏

近畿大学 教職教育部

本庄 眞 氏

奈良流水生物研究会

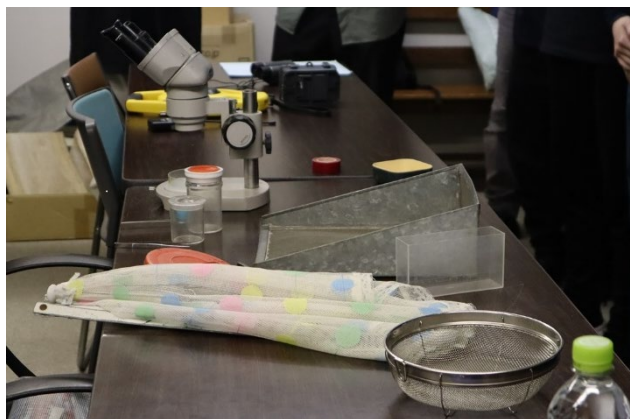
奥吉野自然研究会

昨年に続き、大和の森が持つ地質学的特性や生物環境、そして風土の形成過程を掘り下げました。足元の地球を深く潜るように（アースダイブ）、古代からの記憶をたどる探究を通して、持続可能な森と人とのあり方を考える、という内容となりました。

大和青垣の形成プロセスを、足元に転がっている石や溪谷沿いの岩や断層から考え、その植生も観察。また、里山の動物の食痕や昆虫の実態などを観察し、その問題点と課題への理解を深めることを目標として、午前は座学、午後はフィールドワークを行いました。

今年度は人文、国際、医療の3学部から13名が参加。4月に行ったオリエンテーションで集まったものの、その時は、ほとんど会話をする事がなく、今回がほぼ初対面のような状態でした。ですが、それぞれが協力し合い、充実した実習となりました。以下、学生たちの感想の一部を紹介します。

今回の授業では座学による研修とハタの滝によるフィールドワークを行った。研修では山の定点カメラによる熊やカモシカの映像の閲覧やカモシカの調査事例に関しての話を聞いた。特に印象に残ったこととして、山



や川の調査に使う道具として、ペットボトルの蓋や蚊帳、などを使用するということ。調査に使えなさそうな道具でも使い方次第で使えるということに感心した。（宗教学科1年斎藤響輝）



カモシカの生態、地層と岩石について授業を受けた。表層の地形的環境や深部の地層構造などといった違いはあるもののそれぞれの根幹を支える重要な存在である事を改めて窺い知れた。それぞれの講義を受けて、ジャンルこそ違うが山と川の関連性に大きく影響するものだと改めて

感じた。一見分かりづらいがそれらは明確な繋がりを持ち、自然という概念を形成しているのだとよく理解できた。(宗教学科 4 年三浦弘道)

午前中は本庄さんと佐竹さんとお話を聞かせてもらったが、私にとって驚きでいっぱい座学でした。(心理学科 1 年根来紋加)



午後からのフィールドワークでは、自分の生活はこんなに自然であふれているのだと新鮮な気持ちになった。(国文学国語学科 3 年横田陽香)

私たちがいま生きている地面の下には考えもつかないような歴史が広がっていることを知り、とても驚いた(歴史文化学科 1 年安川莉咲)



林道には多様な植物が生息し、滝から川にかけては多種多様な生物が息づいていることを観察することができた。教室内での座学だけでは得られない、実際に体験することの大切さを感じることができた。(看護学科 1 年三村理恵)

初めてローカリーアクトの授業を受けて、思っていたよりもずっと面白くて楽しい、学びのある授業だなと思いました。（国文学国語学科3年北村羽津紀）

本講義を経て、身近な自然に対する見方が大きく変わりました。（看護学科1年門口桃子）



6月6日 カヤック体験 森と海のつながりを考えるの報告

講師 幸田 高由 氏 秘密基地研究会長
北野 信久 氏 みえ森づくりセンター長

SDGsの視点から、森を流域圏から考え行動することの大切さを体感するため、カヤックや船に乗り、勢田川とその周辺を観察しました。また、みなとまち再生グループ¹の地域おこしの地道な実践を学び、交流を深めました。



以下、学生たちの感想の一部を紹介します。



最初にパドルの持ち方や川に生息している生き物の説明をしていただき、毒があるとか腫れるだとかの話聞いた際には不安の気持ちでいっぱいだったが、一度乗ってパドルを動かしてみると、クロールをする際の手のひらで水を押し、進んでいくのと同じような感覚になり、自分の力でカヌーを動かしていることを強く実感して心が動かされた。また、みずき号に乗って勢田川をすすみ、河崎の蔵や朝熊山などの説明をしていただいた。(国文学科3年 横田陽香)



伊勢でのフィールドワークは、自然と人間のつながりを深く考える貴重な機会となった。また、元宮大工の村田耕一氏の職人の道具と技術にも強い衝撃を受けた。船の模型図で見た構造の工夫とも共通するが、自然の素材を切り捨てず、その特性を極限まで活かす姿勢に感銘を受けた。
(看護学科 1 年門口桃子)

遊覧船から川と海を観察し、森から流れてきた水が川を通して海へつながっていることを実際に見ることができた。森で育まれた栄養分は川によって海へ運ばれ、そ



の栄養が海の生き物を育てている。そのため、豊かな海を守るためには森を守ることも大切であると感じることができた。(看護学科 1 年三村理恵)



みずきという船に乗って河崎まで行った。20 年に一度行われる式年遷宮のお木曳行事についての説明や、伊勢神宮は 125 の社が集まって伊勢神宮ということなど、さまざまなことを教えてもらった。

特に印象に残っているお話が二つある。一つ目は年に二回、太一御用という伊勢神宮の神様に愛知県の篠島というところから干鯛を供える行事についてである。その際、太一御用の前



は、伊勢神宮に収める大事なものを載せているから横切ってはならない。二つ目は、魚が跳ねてびっくりしていたら、ボウだと教えてもらった。時々船に入ってくるその魚は、とても臭いため絶対に触らないでと言われた。(国文学国語学科 3 年北村羽津紀)



みなとまち再生グループ¹

あの頃、中国に行く理由

国際学部中国語学科 山本 和行

近年、日本を含む国際社会の状況は、悩ましいほどに厳しさを増しています。そんななか、外国に興味を持ったり、外国語を学んでみようと思う若い人は、年々減っているというような声を聴くことがあります。それでなくても、日本社会は円安や物価高騰、さらには中東情勢の影響を受けた原油不足と原油由来の物資不足が大いに懸念されている状況にあって、自分たちの生活圏の外に関心を持つことへのハードルが異常に高くなってしまっているように感じます。ですが、本来、海外に関心を持って現地へ実際に足を運んでみることは、そこまでハードルの高いものではないはずだと思うのです。

自分自身を振り返ってみると、最近、2015 年 12 月に作った 10 年有効のパスポートが更新時期を迎えたので、出入国スタンプを見返していました。すると、ここ 10 年のうちに、中国に渡航したことは一度もなかったことに気づきました。自分のスマホに保存されている写真は 2010 年までさかのぼれますが、これを見返しても、中国で撮影したような写真は一枚もありません。あとは、実家の物置を探れば、中国に行った時のなにかしらの「思い出の品」は出てくるのかもしれませんが、それを除けば、もはや自分の記憶をたどるしか「自分の中国渡航履歴」を確認するすべはありません。

以下、これを機に、記憶だけを頼りに「初めての中国渡航」を書き連ねてみたいと思います(ので、いくつもあるだろう「記憶違い」はご了承ください)。

1997 年の夏ごろ、僕が天理大学国際文化学部中国学科の 2 回生だったときに、同級生の友人とふたりで上海・蘇州に行ったのが、僕の初めての中国渡航だったと思います。海外旅行のガイドブック(当時は『地球の歩き方』がメジャーでしたが、僕は『個人旅行』を買っていました)を買い、格安航空券の情報が掲載されてある雑誌で一番安かった中国東方航空のチケットを購入しました。このときに確か、飛行機にするかフェリー(鑑真号)にするかで悩んだ記憶があります。

このころはまだ現在の「浦東空港」は開港されておらず、以前の「虹橋空港」に到着したと思います。そこからバスで外灘に向かい、外灘付近の古くて安いホテルにチェックインしたのが夕方あたりでした。このホテルに決めたのは、租界時代の古い建物をリノベーション

して利用しているホテルで、エレベーターのドアが手動式の蛇腹扉だったのを何かで見て、「ここに泊まってみたい!」と思ったのだと記憶しています。そして、チェックイン後は早速街に繰り出し、外灘をひととおり散策し、夜も更けてきた頃合いに、租界時代からあるジャズバーで、まだ 20 歳になったばかりだったので、人生で初めて「ソルティードック」なる「おしゃれなお酒」を口にしながら、ジャズの生演奏を楽しんだのでした。

翌日は確か、伝統的な建物や庭園が残されている「豫園」にも行ったはずですが、あまり記憶に残っていません。次に覚えているのは、上海から蘇州まで船で一泊しながら移動したことです。狭い船室の二段ベッドの上下に友人と分かれて寝て、朝方にドアを激しくノックする音に飛び起きたら、船員がゴミの回収に来てくれて、ゴミ箱を渡すと、そのままゴミ箱のゴミを川に放り投げて「処理完了」となったことに、友人と大笑いしたことを覚えています。このエピソードは今でも、この友人との笑い種です。

初めての中国渡航の記憶は、だいたいこんな感じです。そもそもカメラを持っていっていませんでしたので写真は一枚も残っていないし、ほとんどの記憶は曖昧です。今、あらためて地図を見ると、船で向かったのは蘇州ではなく杭州だったのかもしれませんが、それに、言葉もどうしていたのか、まったく記憶がありません。まだ中国語の学習を始めて一年半ほどでしたから、中国語のレベルは推して知るべし、という感じだったはずですし、ほとんど通じなくて嫌な思いもたくさんしたはずですが、そうしたことはまったく覚えていません。それでも、ここに書いたような記憶が残っているというのは、たぶん、「外灘に行きたい!」「租界時代から残るジャズバーに行きたい!」「中国で船に乗りたい!」などの思いが、中国に渡るそもそもの動機としてあったからだと思います。言いかえれば、「中国語を話したい!」とか、「中国文化に触れたい!」とか、「中国の人たちと触れあいたい!」といったような「高尚な理由」は、少なくとも、その時の自分の中国行きの動機のなかにはなかったようです。

そう言えば、「中国料理を食べたい!」もなかったな…現地で食べたはずの料理の記憶も残っていません。

今思えば、中国に行くことは自分のなかでも、また周囲の環境も、あるいは社会情勢などもあいまって、それほどハードルの高いことではなかったのかなと思います。アルバイトで旅行の費用を貯めたり、旅行の情報をアナログな形で地道に集めたり、それなりの労力は使ったと思います。それでも、「～したい!」という思いだけで、中国に行って、その思いを果たして帰ってくるのに、そこまでの「ハードル」を感じたことはありませんでした。

そのころから、気づけば 30 年近くが経とうとしています。今の学生さんたちにとって、中国はどんな存在になっているのでしょうか? もちろん、自分の「時代」が以上のような感じであったのだとすれば、周囲の環境や社会情勢が変われば、そこには高いハードルがどうしても設定されてしまうでしょう。経済的な理由で中国に行けない、海外に行けないというのは深刻な問題だろうとも思います。また、日中関係の「悪化」もあり、安全面への不安などから中国に行けないということもあるでしょう。

ただ、もし、中国に行くということについて、「高尚な理由」が必要だったり、「心理的ハードル」が高かったりするような状況になっているとすれば、それはあまりにも残念なことだと思います。そんな思いを抱えながら、日本と中国との関係を眺める日々がつづいていきます。

心の健康法 25

自分をいたわり、大切に取扱いましょう！！

総合教育センター 仲 淳（臨床心理士）

今年はちょっと早めに梅雨が明けましたね。また去年のように、ものすごく暑くなったらどうしよう？とちょっと心配ですよね。暑い季節もそうなのですが、日々を元気に調子よく過ごしていくためには、無理をしすぎないことが大切です。思い切りがんばることもとても大切なのですが、がんばったら、必ずその分の栄養補給をする(自分をいたわる)ことがとても大事なのです。

それは心（気持ち）の面でも同じで、自分を抑えたり、無理をしていろいろ我慢し続けていると、だんだんしんどくなってきて、メンタルダウンしてしまうことがあるのです。

ゆっくり眠ったり、おいしいものを食べたり、気楽なおしゃべりをしたり、思い切り好きなことをしたり。キレイなものを見たり、いい香りをかいだり、お気に入りの音楽を聴いたりして、自分を解放すると、こわばりや疲労が解消して、脳にもからだにも、エネルギーが戻ってきます。

なにをするにも、まず最初に「自分自身」を大切に取扱う。大事にいたわる。セルフメンテナンス。そうすると、自然にまわりにもいいはたらきかけをしていけるようになるのです。自分を「慈」しんで、自分を「愛」して、たっぷりご慈愛（ご自愛）しましょう！！

編集後記

なんと、CRADLE、30 号目の発行となりました！

2012 年 5 月に創刊号を発行した CRADLE。それから 14 年。教員、卒業生からのメッセージや、森に生きるの活動の様子などをお伝えしてきました。これからも皆さんが楽しみにしてくれるようなニュースレターになるよう、編集一同がんばります！！

これからもよろしくお願いします(杉)



CRADLE(クレードル) 第 30 号 2026 年 7 月発行

発行者 吉田 智佳 天理大学 全学教育推進機構

編集 仲 淳 杉本 めぐみ

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050 電話 0743-63-7092 (内線) 6111

印刷 天理大学 DP センター